

ハワイ語における機能語 ‘ana’¹

岩崎 加奈絵

kanaiwasaki@hotmail.co.jp

キーワード： ハワイ語 東部ポリネシア諸語 文献研究 機能語 名詞化辞
名詞の動作性

要旨

東部ポリネシア諸語のひとつであるハワイ語²において、‘ana という機能語が頻出する。一般にこれは名詞化辞と呼ばれ、用例の提示以外で取り扱われることは少ない要素である。だが、先行研究および民話資料を参照すると、そのような単純な定義と矛盾する用例が見られ、文法記述の具体性および体系的観点からもより詳細に取り上げ、性質を提示すべきであることがわかる。

本稿ではその試みとして、‘ana が実際にどのような記述をされるべき要素であるか実例の観察より考察した。その結果、‘ana は名詞化辞ではなく先行する内容語の動作性を強調する要素であると定義する。ただし同時に、ポリネシア祖語研究の知見から、元来はやはり名詞化に準ずる機能を担っていたものが変化した結果であるとも予測している。

またその上で、言語状況に鑑み、ある言語要素の自然変化の断絶と、後の復活という経緯において、文法記述研究がどのような影響を与えうるものかについても注目すべきであると主張した。

1. はじめに

1.1 議論に関係するハワイ語の文法事項

VSO 語順、音素が 13 と少ないハワイ語は、東部ポリネシアの他の言語と互いに非常に似通っている。詳細な記述については種々の問題を含むが、特に近い言語であるマルケサス語等に比べると、文化・民族的関心の高さから研究・記述はよく行われているといえる。

機能語は closed class の性質上区分しやすいが、内容語の語類についてはしばしば議論があり、本稿の議論に関係する点でもある。多少の差異はあるが、先行研究では (a) 動詞、(b) 名詞に二分するのがスタンダードであり、動詞はさらに「自動詞・他動詞・状態動詞」等、通言語的によく使用されるラベルを用いて下位分類を行う。

内容語の語類認定上の課題は、二つのレベルに分けて考えると見えやすくなる。

¹ 本稿は修士論文である岩崎(2009)および第 142 回日本言語学会春季大会での ‘ana に関する問題を取り扱った口頭発表に関する諸氏のコメントを踏まえ、また、ハワイ語の言語状況に鑑み、「話者・学習者と文法記述の影響関係」の観点を加えつつこの課題について再考したものである。

² ハワイ語は母音/a, e, i, o, u/とその長母音(マクロンで示す)、子音/h, k, l, m, p, w, n, ʻ/ (ʻは声門閉鎖音を示す)で表記される。オーストロネシア語族東部ポリネシア語派に属し、孤立語、対格言語とされ、文は動詞文と名詞文に大別されるがいずれも「[述語]±[主語]±[目的語]±[その他の要素]」という基本語順である。

まず、センテンスのレベルでは、共起する要素（冠詞、アスペクトマーカ―等）や出現する位置などから、その内容語が名詞・動詞のどちらとして使用されているのかを殆ど揺れなく判断できる。

しかし一方で、品詞の判断を周辺要素に頼るため、話者のレキシコンのレベルに限って言えば、ある内容語が名詞・動詞のどちらであると決定することはできない。このため、例えば Pukui and Elbert(1986)は名詞・動詞に加えて“noun-verb”というカテゴリを設定している。実際、動詞・名詞いずれかの用法しか持たないと言い切れる語は非常に少ない。

以上を踏まえたうえで、筆者としては、(1) センテンスレベルでは「動詞」と「名詞」の 2 カテゴリを認め、(2)レキシコンのレベルでは、(機能語に対するものとしての)「内容語」1 カテゴリのみを認める。

センテンスのレベルで見れば、たとえ同じ音形を持つものだとしても、文における機能が明確に異なるため、内容語が 1 カテゴリしかないと言い切ってしまうと文法記述は非常にしにくくなる。かといって、固有名詞等を除く語、つまりはほとんどすべての語に内在する特性として「動詞」「名詞」を付与するというのも非効率である。よって、抽象的な「内容語」でしかないものが、使用の際に「動詞」「名詞」いずれかの役割を付加される、と 2 層で考えることが、折衷案として妥当であると考えからである。

以下注記のない限り各用語はこの立場にしたがって使用しているが、いずれにしても、いわゆる動詞と名詞との境界線があいまいである、という事実は非常に重要である。

その名詞・動詞ともに活用・曲用はせず語形変化は少ない。テンス・アスペクトは主に particle を共起させる形で、名詞の単・複は冠詞の形ややはり particle の共起によって示される。

このように小辞の使用が発達していると考えられているが、一方で接辞の使用については、「分析可能で存在は認められるが、生産性は低い」という立場が広くみられる。例えば Causative の接辞 ho'o など、頻繁に見られるものも僅かにあるが、ほとんどの語においては接辞形が化石化している、と見なすのが妥当である³。また、関連する要素として「名詞化接辞」と記述され、祖語にさかのぼり可能なものとして、接尾辞の -na がであるとされる。本稿では、これと対照して「分離形」と呼ぶことのできる 'ana に話を限定するが、主に祖語や近い諸言語との関連の際には考慮に含めるものである。

1.2 'ana を含む句の構造

'ana を含む句の基本構造は以下に示すとおりである。

[決定詞；冠詞、指示詞、所有形など]+内容語+'ana (+目的語等)

³ 言語事実を直接反映するかどうかは別とすれば、現在のハワイ語学テキストでは、ho'o などを見て分析可能であることは理解できるような記述をしているが、自分で付加して語形成を行うなどの操作は示されていないことが多い。また、ho'o が付加された語についても、必ずしも causative+語根の意味、から導き出される語義を持つとは限らない。

- (1)⁴ ka 'ōlelo 'ana 「言うこと」 (Ho'oulumāhiehie[2007:8])
 ART say
- (2) Ua 'ike au i ka 'ai 'ana o ka popoki
 PRF see 1SG PREP ART eat POSS ART cat
 i ka manu (Hopkins[1992:186])
 PREP ART bird

「私は猫が鳥を食べるのを見た(lit. 私は猫の鳥を食べるのを見た)」

必ず決定詞を伴うことや、文中で主語・動詞目的語・前置詞目的語などの位置に立ちうることなどを見る限り、'ana を含む句は常に一般的な名詞句とほぼ同様の機能を有しているといえる。実際これまで見られた用例のうちほかの働きをしているものは見つけられず、上述の構造も見出し等の例外を除き強く守られている。内容語が示す動作の動作主も、名詞に付加される要素のひとつである所有形を使用して示される。

他方で、'ana の後ろには内容語が示す動作の対象、いわゆる目的語にあたる句が、一般の動詞文の場合と同様の形で後続するなど、一定の動詞らしさも保持していると考えられる。

2. 先行研究における'anaの扱い

ハワイ語研究の代表である Elber and Pukui(1979: 79-83)において、名詞化接辞とされる·na と同時に、'ana も同じ名詞化現象を起こす particle として導入されている。

'ana と接辞形の意味上の違いとして、接辞形は「一つの行為や目的を指す(行為そのものより、行為の結果や方法)」(括弧内は Alexander[1968:25]⁵の引用)のものであり、一方'ana は「進行中のプロセスを示す」ものであることが普通である、とし、その意味で、'ana は英語の現在分詞に訳されることが多いと説明しているのである。

また、'ana は「名詞(と普通考えられるもの)」にも付加される、とした上で「土地(āina)」および「農夫(mahi'ai)」の例を挙げている。これは「名詞化」辞の概念からすると、不自然な記述である。こうした用例は多くはないと思われるものの、あるとすれば'ana が付加されても名詞句→名詞句、と文法上はカテゴリ移動のない変化ということになる。

Schütz, Kanada and Cook (2005)は辞書形式の簡易的な文法書だが、項目数が多く、近年の知見を豊富に含んでいる。'ana の項を見ると、意味に関して他の研究にはあまり見られない記述がある。

⁴ 本文中、ハワイ語文の和訳は筆者による。またグロスについて、小辞、前置詞や位置詞などより詳細な記述や訳語をあてる方が読みやすいものも少なからずあるが、本題に関わらないところで煩雑になるため今回は大まかな品詞情報のみとしている。

⁵ Alexander, W.D. A Short Synopsis of the Most Essential Points in Hawaiian Grammar, Rutland: Charles E. Tuttle Co., 1968. (First Published in 1864)

<前部要素=指示詞の例>

- (7) 'a'ole e hiki iā Hi'iaka ke 'alo a'e i kēia uhau 'ia 'ana
 NEG PREP can PREP H. ART evade DIR PREP DEM offer PASS
 maila ona i ka pua'a hiwa (HI:87)
 DIR POSS PREP ART pig black
 「ヒイアカにはこの黒い豚が捧げられるのを避けることはできなかった」

- (8) i kēlā nalowale 'ana nō o Pele (HI:27)
 PREP DEM disappear INT POSS P.
 「そのペレの消失で、…」

- (9) a ma hope iho o kekahi mau pāna'i 'ōlelo 'ana
 and PREP LOC DIR POSS some PL reciprocate say
 ma waena o lākou (HI:69)
 PREP LOC POSS 3PL
 「彼らが挨拶を交わした後で」

<前部要素=所有形の例>

- (10) ho'āuaua maila kāna hele 'ana (HI:64)
 hurry DIR POSS go
 「彼女の移動は急いでいた」
- (11) a ma mua na'e o ko lākou nei 'ai 'ana (HI:65)
 and PREP LOC yet POSS POSS 3PL DEM eat
 「しかし彼らが食べる前に」
- (12) ma ko Hi'iaka 'ōlelo 'ana (HI:47)
 PREP POSS H. say
 「ヒイアカが言うと」

また、'ana 句に使用される内容語のうち、数の多かったものを参考までに挙げる。

- (13) 'ōlelo 「言う」、hele 「行く」、'ike 「見る・わかる」、pau 「終わる」、kama'ilio 「会話する」、'ai 「食べる」、make 「死ぬ」、lohe 「聞く」、hiki 「～できる」、ho'omau 「続ける」、iho 「降りる」、kāhea 「呼ぶ・叫ぶ」、hana 「～する」、ne'e 「(じりじり) 動く」、loa'a 「得る」、hō'ea 「到着する」、paeaea 「謡う」、hā'awi 「与える」、ho'i 「戻る」、kau 「謡う」、lele 「飛ぶ」、nānā 「眺める」、noho 「滞在する」

3.2 考察(1) —自然変化末期における‘ana の性質

前節で例を示したとおり、‘ana 句は「～すること」を原義にもち、同時に使用される他の要素により日本語的解釈を加えると「～する(した)とき」、「～する(した)のを見て」等の用い方をされるのが圧倒的多数であった。

表 1 ‘ana 句が果たす機能の分布とその割合

主語	主語N	述部	目的語	所有形	前置詞	at-ing 節	独立	その他	計
106	37	20	103	92	152	137	16	1	664
16%	6%	3%	16%	14%	23%	21%	2%	0%	-

この表の「at-ing 節」は、時の前置詞 *i/ma* と‘ana 句の組み合わせで「～すること (のタイミング) で」のような構造から、上で述べた「～したとき」という意味で使用されているものを指す。それゆえ前置詞の欄では時間を表す前置詞を除いているが、*i/ma* は非常に幅広い意味を担うことが出来る要素であるため、場合によっては at-ing と判別するのが難しいような用法も一部含んでいるとも言える。いずれにせよ、意味的に言えば「～したとき」の用法が目立つのは数の面から見てもはっきりしている。

以上のように「一般的な用法」を提示しうる程度には偏りのある‘ana 句だが、今回の 664 例の中に限って見ても、詳細に入ると実は単純な記述では取りこぼしてしまう点がある。その筆頭が、ミニマルペア、あるいはそこまで行かなくとも非常に似通った構造や意味を持つ句でありながら、‘ana の有無以外の違いが見いだせない用例のペアが見受けられる点である。以下にその例を挙げる。

- (14) (a) "ua pono," wahi a Pele i pane mai ai i
 PRF good saying POSS P. PREP reply DIR PART PREP
 kona pōki'i me ka ho'omau mai nō i ke kama'ilio 'ana
 POSS sibling PREP ART continue DIR INT PREPART talk
 『『よろしい』、とペレは自分の妹に、こう言い続けてこたえた』 (HI:33)
- (b) wahi a Hi'iaka i pane mai ai me ka ho'omau 'ana
 saying POSS H. PREP reply DIR PART PREP ART continue
 mai nō ho'i i ke kama'ilio 'ana
 DIR INT PREP ART talk
 『ヒイアカはこう言い続けてこたえた』 (HI:100)

- (15) (a) ho'opa'a mai 'oe i ka hele mai ma kēia wahi (HI:61)
 close DIR 2SG PREPART go DIR PREP DEM place
 「お前はここで来るのをやめろ」

- (b) i ha'i mai nei ia'u ma mua o
 PREP say DIR DEM PREP+1SG PREP LOC POSS
ku'u hele 'ana mai nei (HI : 70)
 POSS go DIR DEM
 「(その女性は) 私が来る前に、私に言った」

(14)のペアは意味も構造も非常に近く、特に同じ前置詞 *me(with)* の目的語となる名詞句、*ke kama'ilio ('ana)* に着目すると、最小対に近い例と考えることができる。どちらも(「過去」の時点で行われた) 具体的な発話を導入する節であり、細かく見ても意味上の差異を見出すのは難しい。

また(15)のペアは、いずれも *hele mai* 「来る」を名詞句として使用している例で、(a)ある以前の時点から現在まで「来て」いること、(b)ある過去の時点で私がある場所に「来」たことについて述べている。ここでは、'anaがある場合と無い場合では、発話時点で行為が完結しているか否かが異なっている。しかし、他の例を参照して'anaのある場合に指しうるものを考えると、必ずしも行為が完結している必要は無く、例えば、現在進行中のことについて指している例も実際出現している。よって、たまたまこのペアではその違いが出ていると考えられる。対にして考察されるべき用例の種類はほかにもある。

- (16)(a) ...hiki 'ana ke hā'awi aku iā lākou i ka 'ae 'ana
 can ART give DIR PREP 3PL PREP ART assent
 a me⁷ ka hō'ole,
 and ART refusal

「(彼女が) 彼らに肯定や否定を与えることができる」 (HI:100)

- (b) nāna nō ia e pane mai no kona 'ae
 PREP+3SG INT 3SG PART reply DIR PREP POSS assent
 a me kona hō'ole i ka ho'okūkū he'e nalu 'ana me 'oe
 and POSS refusal PREP ART compete surf PREP 2SG
 「彼女が、あなたと波乗りで競うことについて肯定や否定を与え(られ)るように」(HI:85)

この例では'ae「肯定」と'ole「否定」という対義語が並列されているが、(a)が片方にのみ'ana

⁷ a me はグロスにおいて一まとめで“and”としているが、これはこの形全体で名詞句の並列に使用される句である。

を伴い、(b)ではどちらも伴っていない。これらの内容語に省略された'ana を想定することができるかどうか、あるいはハワイ語一般にみられる対的な表現の場合の省略可能性、傾向などより広く見るべきものではあるが、ここでも'ana の必然性や意義についての揺れと見なしうるものが現われている。

これらを踏まえたうえで、では'ana は「名詞化を引き起こすが省略可能」という確認がたい要素であったのか、あるいは少なくともそう記述することが言語学的に妥当であるといえる要素であったのかについて考えたい。

1.1 で述べたように、もともとハワイ語話者のレキシコンにおいては内容語カテゴリの中で動詞と名詞が完全に分化しているとみなすのは適当ではないと考えられる。そのなかで品詞転換機能を持つとみなすことには慎重にならざるを得ない部分がある。実際、(13)で挙げた頻出内容語の大部分が、動作を示す名詞用法も動詞用法も有している。

この点で言えば、むしろ文のレベルで、動作にしる事物にしる抽象概念にしる、およそ名詞として働いている語すべてと共に起すのは'ana 句構造の中の「決定詞」である。1章で述べたとおり、センテンスレベルで品詞の判別を行う際には周辺要素が決定要因になるのであり、その意味では「決定詞の先行＝その内容語（とそれを中心とする句）が名詞として機能する」と言うことができる。このことより、仮にいわゆる「名詞化」が起こっているとしても、ある動作的な意味を有する内容語が行為名詞的なものとして解釈されるかどうかは、'ana よりむしろ決定詞が担っていると考えの方が妥当である。決定詞こそがいわゆる「名詞化」を担っていると考えれば、最小対の存在も、省略可能であるという記述も問題にならない。

3.3 考察 (2) 'ana は「何もの」か

残る課題は、では'ana は何なのか、という点である。そこで'ana 句と非'ana 句（ここでは'ana の付かない動作性を含む名詞句を指す）をそれぞれに見てみると、両者の間に一定の差異があることがわかる。以下ではこの差異について例示をしつつ述べる。

ハワイ語の内容語のうち、頻出語彙のかなりの割合が実態として同音形で動詞・名詞両方の用法を等しく認めることができるものであるが、そのうち「名詞」として使用された場合に着目する。

「行為と関連する意味」を持つ用法には、(A)行為名詞（行為そのものを表す）の場合と、(B)行為に関連する事物・人などを表す場合の2種がありうる。以下に一例を示す。

表2 同音形がもつ、行為と関連する意味の語例

	'ōlelo	noho	kia'i	hoe	'ike	malihini
(A)	言うこと	座ること	守ること	漕ぐこと	知る/見ること	新しい/珍しいこと
(B)	発言・言語	椅子・ベンチ	番人	オール	知識・視覚	よそ者

「言うこと」と「発言」のように、それが行為そのものなのか、その結果により生じるモノを指しているのか判然としないものもあるが、行為者や状態を帯びた人、あるいは行為の道具などを示す例があることもまた事実である。

以上から想像されるように、文中においてある名詞が、「行為に関連する意味かそうでないか」、また前者の場合では、「行為そのもの or それに関係するモノ」、どちらを表しているかの解釈は文脈情報の助けを必要とする。

当然のことだが、ある語がある文においてどんな意味を表しているのかの判断に際し、文脈情報が要請されること自体は全く珍しいことではない。しかし'ana 句の場合は表しうる意味が表における(A)、すなわち行為そのものしかない⁸。このことから、内容語に'ana が後続した時点でその句の意味解釈の幅が「行為そのもの」に限定されることになる。

ここまでの用例観察より、今回用例抽出の対象とした時代の共時的観察においては、'ana を名詞化というプロセスに関する語であると見るよりも、先行する内容語が行為そのものを指す要素であることを明示・強調する役割を担っていた、という見方が妥当である。あくまで強調にすぎないために必須ではなく(=省略可能である)、付加されている場合は行為そのもの(いわゆる動作性を持つ語)と即断できるのである。換言すれば、'ana の無い句の場合に存する、「行為に関係するモノ」を意味する可能性を消し、結果として話者の解釈の負荷を減らす役割を果たしていたものと考えられることができる。

ハワイ語は音素が少なく、一般的な人間の処理可能一語あたり音節数にも限度があるため、必然的に同音異義語の割合も高くなりがちである。こうした場合、解釈の負担を軽減する措置は特に重要である。また同音異義語に行為とは無関係な物質名詞としての用法しかほぼ持たないようなものがある場合もあり、そうした場合解釈の可能性を最初から大きく限定できることになる。このような支持要因も併せて考え、本稿の主張を改めて提示する。

(17)

ハワイ語自然変化末期の'ana の機能は、先行する内容語の動作性(=行為そのものを指しているということ)を明示、ひいては強調する、というものであった

4 通時的観点から見る'ana

4.1 通時的観点①：東部ポリネシア諸言語における類似要素

ここまではハワイ語のそれも共時態に注目して話を進め、用例に基づきその時点における機能の記述を提示してきた。本節ではもう一つのアプローチとして、ポリネシア祖語の段階にさ

⁸ ここで挙げた以外にも、'ana 句は抽象的な行為(実際に行われていない、あるいは将来も行われる見込みがないもの)を指す用法は殆ど見られない、という、「行為の個別性」という特徴を有すると見ている。しかしこれには過去の習慣に使用できるなど例外も少なくは無く、そもそも抽象的な行為を表現する例自体があまり見られなかったことから、用例分析の結果として提示するには別のアプローチによる調査を進める必要がある。よって、ここに注記するにとどめる。

かのぼって考え、'ana の由来や経緯について一言述べておく。

Chung(1973)はポリネシア祖語に名詞化接辞の*-(C)(a)ngaを想定している。実際、ポリネシア諸語の記述を見る限り、多くが類似の要素を今でも残している。接辞であるという点ではハワイ語の'anaとは異なるものの、これについては先に挙げた「名詞化接辞」-naを併せて考えることができる。

- (18) マオリ語：-tanga,-hanga,-nga etc. 《総称 Canga suffix》 (Bauer[1997:21])
トンガ語：-nga (Churchward[1959:382])
ラパヌイ語：-Vŋa/-hana (Du Feu[1996:176])

こうした要素は、「行為に関連する語が、それに何らかの形で関連する意味を持った名詞として機能する」ための接辞であると見なされる。各々の記述や祖語再建については時期や精度にある程度注意しなければならないものの、基本的にはやはり何か「名詞化」または「そう見える何らかの現象」を引き起こす要素として*-(C)(a)ngaがあり、それが各地域でそれぞれ別の形に変化していったと見るのが妥当と思われる。

以上より、ハワイ語でももともと名詞化やそれに類する現象を起こす要素があったのが、変化を経験することで、前節で提示した機能にまで遷移したと推定する。可能な過程の例は次のようである。

- (19) ポリネシア祖語：*-(C)(a)nga (現時点では仮に名詞化接辞と考える) が存在

↓

ハワイ語初期～中期①：接辞形の-naと独立形の'anaに分化しつつ残存

↓

ハワイ語初期～中期②：接辞形は付加された形のもものが語彙化

(意味予測可能な)独立形は生産的な要素として残る

↓

ハワイ語後期：予測可能性から、独立形'anaは余剰な要素として必須でなくなる

残存資料の性質上細かな検証は難しいが、近縁の言語における*-(C)(a)ngaのcognateの性質も見つつ、こうした仮説を検証していくことが今後の課題である。

4.2 通時的観点②—「現代ハワイ」語における記述

2012年現在、主にアメリカ合衆国ハワイ州において、ハワイ語は多くの人々の関心を集め、

盛んに学ばれている。大きな原動力のひとつがポリネシア人・ハワイ人⁹としての民族意識であることは確かであるが、そこに含まれない人々もハワイの「ローカル」として関心を持っているといえる。ハワイ大学やカメハメハ・スクールといった各教育機関、あるいは点在するイメージンプログラム校 (Pūnana leo) を中心に、ハワイ語を第2言語の域まで高める、あるいはそれを越えて母語にする体制づくりも行われている。

文化的に言って、最もハワイ語が欠かせない領域はフラ・コミュニティ¹⁰である。入退場時や関連儀式の祝詞、そして現代・古典を問わず、使用される曲の詞はハワイ語によるものであり、その教育についても元来の口承伝統の色合いを今でも強く保ち、フラ人口はハワイ語に関する知識を程度の差はあれ有する人間の数にそのまま含まれる。

一方、行政面ではハワイ語を州公用語として扱い、各種公文書や標識等に使用されて久しい。さらに高等教育機関において、近年では学位論文がハワイ語により執筆されるケースも増えつつある。

このように、言語としてハワイ語は現在一定の活性を保っているといえる。少なくとも、数年先に「話者」と呼べる人が一人もいなくなる、ということは想定しにくい。かといって、ハワイ語が真に母語として使用されるようになるかといえば、可能だとしても圧倒的小規模のコミュニティに限られることになるかと予想される¹¹。

上述のような状況におかれているのはハワイ語に限らないが、そうした言語をどのように捉えるか、あるいはその捉え方の一つとしてどのように称するか、は自明ではない。「消滅の危機に瀕した言語」という言葉から一般に連想される状態からすると、活性があり習得人口も少なくないが、一方で自然変化が一度断絶したとみなしうる状態であるうえに現在は規範文法書を抛り所として習得が行われ、圧倒的に強い言語である英語と隣り合うがゆえに伸長・浸透の限界は否めない。留保なしに「生きている言語」と呼ぶには議論の余地が大いにある。

もちろんこれについては、別段どちらと決めなければならない訳ではない。言語現象の分析自体は資料、すなわち言語事実に基づけばよいからである。ただし文法記述をする上で、ハワ

⁹ ちなみに自己申告以外で現在、パブリックかつ客観的に「ハワイ人」であるとされる条件は主に法令にあり、一例としては“Native Hawaiian means an individual any of whose ancestors were natives of the area which consists of the Hawaiian Islands prior to 1778.” (Code of Federal Regulations, Title 45, Part 1336.62) があるが、一般にはより古い公文書記述である“Hawaiian Homes Commission act”(1920)にみられる ““Native Hawaiian” means any descendant of not less than one-half part of the blood of the races inhabiting the Hawaiian Islands previous to 1778.”に基づき、50%以上の血の継承を基準とすることが多いという。

¹⁰ ハワイ諸島における伝統芸術のフラは、多くの場合、ハラウという場を中心に、師(kumu)から弟子たちに厳格に伝えられ、その弟子が卒業し自身のハラウや弟子を持つ、というサイクルを繰り返すことで継承されてきた。かつて生活に大きく関係・干渉していた、いわば民族・精神的コミュニティとしてのハラウに比べると、現在広くみられるのはもう少し「習い事」寄りの教室になるが、それでも各教室で指導者が歌詞その意味、発音等を程度の差はあれ生徒に伝えていること、それ故にフラを学ぶものがハワイ語を学ぶものでもある、という事実は変わらないと言える。

¹¹ イメージンプログラムの現状や、解決されなければならない課題 (卒業生の進路問題など) については松原他(2008)に詳しい。

イ語が(a)第二(以降)の言語として習得する者が殆どであり、(b)そうした人々は一度自然変化の断絶した、かつてのハワイ語の研究に基づくレファレンスグラマーを(殆どの場合唯一の)基盤としている、という現状を認識しておく必要もあると思われる。

4.3 「これから」の'anaと文法記述に関して

本稿において、20世紀初頭(ハワイ語自然変化末期)時点での'anaは「名詞化辞ではなく、動作性強調と見なすべき機能を果たしていた」とし、一方で名詞化接辞に由来するものであったと考えるのが自然であるということも述べた。

しかし21世紀現在のハワイ語においてもそうである、とは筆者は主張しない。先に触れたとおり、代表的語学テキストを含むほぼすべての文献で'anaは名詞化辞とされている。その上で、どのような場合に使用できるかの例文を紹介する際、大多数の話者・学習者の第一言語である英語における対応構造を並べたりなどしていることから、現在共時の話者たちのなかの「現代ハワイ語」では'ana=名詞化辞と明確に結びつき、定着しているのは確かである。

よって、現在のように規範文法の影響力が強いままの状態であれば、勿論この機能が保持される。あるいは仮に何らかの形で自然変化やそれに近いものを見せるとしても、本稿の主張からすればそれは20世紀初頭から繋がっているものではない、一度途絶えた言語要素が、分析結果としての「定義」から再変化を始めたという見方になる。

その意味で、今後の'anaの使用を見ることは、ハワイ語のような微妙な状況にある言語において、ある要素の自然変化の断絶と、(一応の)復活を経験したものが、その後どのような経過を見せるかというケーススタディになるのではないと思われる。さらに、言語学における文法研究・記述が言語変化自体に与える影響という点からも興味深いと考える。

5. 今後の課題

本稿では、'anaが先行する内容語の動作性を強調する要素である、と主張した。ハワイ語は統語・意味的に必須ではないと予想される、いわゆる *intensifier* と見なされる要素が頻出する傾向にあり、口承文化においてリズムを整えるために使用されていたのではないと言われることがある。'anaが強調の機能を持っていることを直に従来の *intensifier* と結びつけるものではないが、「必須ではない」「内容語後置要素」等、共通する特徴もまた存在する。*intensifier* 自体も今後一層の分析を俟つ要素であることから、こうした「必須ではない」とされている要素への注目を続けていくことで、これまで見過ごされてきた個々の事項を拾い上げ、文法記述体系再構成の一助となることを企図する。

また、4で述べた言語状況、変化、文法記述の三者の相互関係については、ハワイ語に類する状況にある言語の研究・記述を進める上で一定の重要性を有する話題であり、今後も言語現象の記述作業自体とはまた別に注目しておくべきものとする。

略号

1,2,3 人称、SG 単数、PL 複数 (3人以上)、ART 冠詞、DEM 指示詞、DIR 方向詞、INT 強意詞、LOC 位置詞、NEG 否定辞、PART 小辞、PASS 受動マーカー、POSS 所有形、PREP 前置詞、PRF 完了マーカー

参考文献

- Bauer, Winifred (1997) *The Reed reference grammar of Māori*, Auckland: Reed Publishing
- Chung, Sandra (1973) "The syntax of nominalizations in polynesian" *Oceanic Linguistics*, 12: pp. 641-686
- Churchward, C.M (1959) *Tongan Dictionary (Tongan-English and English-Tongan)*, London: Oxford University Press
- Du Feu, Veronica (1996) *Rapanui*, London and New York: Routledge
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui (1979) *Hawaiian Grammar*, Honolulu: University of Hawaii Press
- Hawkins, Emily A. (1982) *Pedagogical Grammar of Hawaiian: recurrent problems*, Mānoa : Hawaiian Studies Program, University of Hawaii
- Ho'oulumāhiehie, (2007) *Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopele*, Honolulu: Awaiaulu Press
- Hopkins, Alberta Pualani (1992) *Ka lei ha'aheo: Beginning Hawaiian*, Honolulu: University of Hawaii Press
- 岩崎加奈絵 (2009) 「ハワイ語神話テキスト資料における'ana の分布および機能」東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士学位論文
- 松原好次他(2008) 『ハワイにおける先住民族言語再活性化運動の成果と今後の課題』(文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、研究成果報告書(平成 17 年度～平成 19 年度))
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1986) *Hawaiian Dictionary: Revised and Enlarged Edition*, Honolulu: University of Hawaii Press
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho'omalū Kanada and Kenneth William Cook (2005) *Pocket Hawaiian Grammar: A reference grammar in dictionary form*, Waipahu: Island Heritage Publishing

法令関係参照元

Electronic Code of Federal Regulations

<http://ecfr.gpoaccess.gov/> (Accessed on April 22, 2012)

Hawaiian Homes commission act, 1920

<http://hawaii.gov/dhhl/laws/Hawaiian%20Homes%20Commission%20Act%201920.pdf>

(Accessed on April 22, 2012)

The Function Word '*ana* in Hawaiian

Kanae Iwasaki

kanaeiwasaki@hotmail.co.jp

Keywords: Hawaiian, Eastern Polynesian languages, literature analysis, function word, nominalizer, actionality of meaning of nouns

Abstract

In Hawaiian, one of the Eastern Polynesian languages, the function word '*ana* is frequently used. Conventionally, this word is taken to be a nominalizer, but there are some problems with this simple definition, such as examples contrary to the definition occasionally mentioned in existing grammars. Thus '*ana* is one of the elements which should be studied in detail in order to develop a more specific and systematic description of Hawaiian grammar.

In this paper, actual examples in Hawaiian folktales are analyzed. As a result, it is argued that '*ana* is not a nominalizer, but an element that highlights the meaning of the action of the preceding noun.

At the same time, however, from the point of view of Proto-Polynesian (PPN) study, it is also stated that originally '*ana* derives from PPN nominalizer-like elements but has changed its function over time.

In addition, considering the Hawaiian linguistic situation, it is also noted that we should pay more attention to the influence that published descriptive grammars can exert. In the Hawaiian case, in particular, both the suspension of natural change in language as well as language revitalization should be considered at the same time.

(いわさき・かなえ 東京大学大学院)